

令和５年度特別の教育課程の実施状況自己評価表（西大和学園中学校高等学校）

目指す学校像	磨かれた「知」を備え、豊かな人間性を持ち、世界を舞台に活躍する次世代を担うリーダーを育成する。
重点目標	1.英語を含む外国語の4技能（聞く・読む・話す・書く）を習得。
	2.中学3年次（アメリカグローバル研修プログラム）、高校1年次（海外探究プログラム）等の実践の場で4技能を使用するために必要な5つの力（主体性・協同性・思考力・判断力・表現力）を習得。
	3.グローバルな視野を広げ、世界で起きていることを自身に置き換え行動することのできる3つの力（多様性・課題発見力・課題解決力）の習得。

達成度	A	ほぼ達成（80％）
	B	概ね達成（60％以上）
	C	変化の兆し（40％以上）
	D	不十分（40％未満）

学校評価						
年度目標				年度評価		
No	課題項目	具体的な方策		課題項目の達成状況	自己評価	次年度への課題
1	4技能の習得	英語の授業	中学１年次から授業時間を週５時間確保し、中学英文法の指導を中心に行っている。又、音声活動も重視しており、洋楽を取り入れ、発音・リスニングの指導に力を入れている。中学２年次には、早期よりライティングの活動を取り入れ、既習文法をベースに自らの意見を述べる機会を積極的に設ける。また、中学２・３年次には週１時間、多読の時間を設け、辞書を用いずにアメリカの小学生向けに書かれた洋書講読を行うことで、速読力・類推力を養う。加えて、講読中に気になった表現や印象に残ったフレーズから、検定教科書や入試問題演習では養われない実用英語に触れる機会を増やしている。	4技能をバランスよく、と同時に初期はまずは「書ける」「読める」を重視した。このことで、リスニングへのハードルが下がった。	B	日本人教員による英語のオンライン授業、ネイティブ教員による国際理解およびイマージョン授業間のカリキュラムの協同が十分とは言えなかった。今後の外国語学習における4技能の重視を鑑みて、教員間のミーティングや交流を活発に行っていく必要がある。
		国際理解	中学１年次は週２時間、中学２・３年次には週１時間、クラスを半分ずつにしてネイティブスピーカーにより、リスニングやスピーキングに加えて、グループワークやディスカッション、速読などの活動を総合的にを行っている。			
		イマージョン	中学3カ年と高校編入1年次に体育、音楽の実技教科オールイングリッシュで実施し、実際に体を動かしたり、実技演習を進めていくなかで自然と語彙・表現を理解し、その習得を目指す。			
2	主体性	英語の授業	自主課題や任意参加の講座を数多く設けることで、自らのニーズに合わせて英語力を総合的に伸ばしていく契機を用意する。	年々英語への意識の低下が見られる。動機付けの点において小学校時の英語学習への後ろ向きな印象が一因と見られる。生徒の特性を鑑みて、親しみやすさを第一目標とすべきである。	B	中学生や高校生の自主的な学びを促すような内容を提供していく必要がある。英語を学ぶフェーズから英語で学ぶに値する題材を教科書の枠にとどまらず検討していくことが求められる。
		国際理解	必ず毎月１～２回、自分の意見をクラス全体で語る場を作り、全体の前で発表する機会を設ける。			
		オンライン英会話	中学2・3年次に週1時間、オンライン上でネイティブスピーカーとの1：1のやりとりを実施し、自ら進んで会話をつなぐことでリスニング、スピーキングの能力伸長を目指す。			
	協同性	国際理解	グループワークを頻繁に行い、毎回指導に携わる構成員を変えることで、様々な生徒と1つの課題に取り組み、支え合う機会を設ける。	グループワークが想定したほどは機能しない学年・クラスが散見された。実施形態の改革が必要と判断された。	C	日頃の学級活動の延長線上にあることを念頭に、道德教育・情操教育を見直す。
		イマージョン	体育における運動や、音楽における実習のなかで、課題に対し協同して取り組む機会を設ける。			
	思考力	英語の授業	検定教科書や英字新聞の読解、英語プレゼンテーション動画を視聴し、国内にとどまらず、国際的な諸問題について英語で情報を収集し理解を目指す。	肯定的な意見が全学年で約80～85％であった。個人やグループで考えをまとめる作業に対し、その達成を生徒が高く実感することができたと考える。	B	高校編入1年生について、未履修の内容が多く、扱う題材が限定的になっていることより、授業進度を上げるとともに、単純な形容詞や文型などで対応できる異文化理解の題材を導入していく必要がある。
		国際理解	グループでのディスカッションを通じて、他者の意見に耳を傾け自身の意見との共通点や差異に注目し、多面的な思考力を養う訓練を行い、グループの意見をまとめ発表する場を設ける。			
	判断力	英語の授業	年度途中から1学年上の題材を扱い、より抽象度の高いトピックに関する知見を学ぶことで、より批判的に物事をとらえる力を醸成する。	「1学年上」のカリキュラムを徹底し、大学受験のみならず海外大学進学を意識したカリキュラムとなった。	B	定着度の差が以前に比べて見られる。早期より学習内容の取りこぼしを防ぐためのこまめなフォローや補習を取り入れていく。
		国際理解	様々なリスニング、リーディング教材を通じて、判断が一筋縄ではいかない内容について多様な価値観を理解する。又、教員と生徒との間での話し合いを通して、価値観を共有する。			
		イマージョン	授業でネイティブスピーカーにより提示される課題について、自分の考えをまとめ、一つの意見を提示するトレーニングを行う。			
	表現力	英語の授業	中学3年次のアメリカグローバル研修プログラムに向けて、アメリカ合衆国についてまとめたレポートやホストファミリーへの自己紹介文の作成を英語で行い、教員の添削をはじめとした指導を通じて、正確かつ洗練された表現を会得する。	海外への修学旅行が再開されたことにより、英語で伝えようという意欲の向上が見られた。帰国後も現地での経験を最大限に生かそうと自主的に取り組む姿勢が見られた。	A	今後も発表の機会を継続的に設けていくことで、さらなる向上を目指す。
		国際理解	中学1・2年次は、身近なテーマをもとにグループワークや発表・プレゼンテーション等を通じて、自身の考えを相手に伝えるための技法を習得する。また、中学3年次のアメリカグローバル研修プログラムに向けて、ホストファミリーや現地校での会話、ディスカッションを想定したペアワーク及びグループワークを実践する。			
		イマージョン	音楽や体育の授業において、英語でのやり取りを通じ作品を完成させ、発表を行う。			
		オンライン英会話	ネイティブスピーカーとの1：1の英会話の中で、自身の言いたいことを伝える機会を多く設ける。			
3	多様性	国際理解	ディスカッションにおいて、一つの意見を正解とするのではなく、様々な意見を正確に理解し共有できるよう促す。	全体的に教材のレベルを上げた。英語力の面でうまく自身の考えを表現できない場面も見られたが、自身の考え以外のものに触れるだけでなく考える契機となった。	B	中学２・３年次で実施しているオンライン英会話であるが、この取り組みの枠を全学年に開放することでマンネリ化を防ぎたい。
		オンライン英会話	毎回異なるネイティブスピーカーが担当し、馴れ合いにならず、常に新しい視点を提供する。			
	課題発見力	多読やオンライン英会話において、異文化にふれることで、自身のアイデンティティを見つめ始めるきっかけをもち、日々の活動においてプレゼンテーションを授業の形として取り入れることで、他者とコミュニケーションを取りながら、歴史や分野、社会情勢に興味関心をもつ機会を得る。中学3年次、高校1年次に参加可能なエンパワーメントプログラムにおいても国際人としてステップアップするために必要な考え方を得る機会を設ける。		中学３年次のアメリカ、高校１年時のアジアへの修学旅行が再開となり、世界の諸問題を考える契機となった。	A	事後学習を充実させ、自身の考えを言語化できるようする。
	課題解決力	授業中において自身の見つけた課題をグループで共有し、ディスカッションを通して自身が体験したことや他者の意見から自身の考えをまとめ、全体での発表の機会を設ける。		ディスカッションやクラス全体での発表の機会が不足している。また、話し合いについてもテーマが稚拙なため十分な議論が展開できていない。	C	(株)ISAによるGCP(グローバルコンピテンシープログラム)を国際理解に代わり導入する。左記「具体的な施策」に記載されている項目をすべて網羅しており、ネイティブ講師と本校教師とのITで実施する。

学校関係者評価		
意見・要望など		
・オンライン英会話については、実施時期・形態を見直し現行の中学２・３年次にとどまらないものにしていきたい。 ・イマージョン教育は、日常の中の非日常を得ることが出来るという点でも、生徒の刺激や成長に欠かせないが、授業時間数の影響より本来であればより多くの時間を割き、集中的に行うべきであるが、徹底できてない。 ・様々な英語の取り組みを刈り込むことで、原点回帰として進学校としての要素をまずは強化していきたい。 ・正課外にネイティブ講師による英検対策講座を廃止し、次年度からは英会話授業も全面的に改定する。次年度が改革初年度となるため、内容の精査・到達目標の明確化を図りたい。 ・同様に昨年度よりの課題であった中学入試において英語重視型入試での入学生徒への対応が十分とは言えない。イマージョン教育をはじめとするオールイングリッシュの授業や課外活動なども実施しているが、中学１年生の４月より英語の学習を始めた生徒と同じカリキュラムであることが実情である。中学段階において、選択型や能力別授業というのは難しいとは思われるが、彼らへの柔軟な対応が具体的に構築されていくことが求められる。 ・海外大学（主に英語圏）への進学への対応した部署が今年度より始動しているが、英語力の点において本校にどのように還元されるのか、あるいはそうした視点そのものが誤りであるかを考えないといけない。		
その他の取り組み		
１：模擬国連 対象：高校１年生・高校２年生 ２：次世代リーダー養成プログラム 対象：高校１年生・高校２年生 ３：エンパワーメントプログラム 対象：中学３年生・高校１年生 ４：アクションイノベーションプログラム 対象：高校１年生・高校２年生		